

火の山の「灯台守」

★阿蘇山測候所 の人びと

- 10・19 微動大となる
- 21 未明よりときおり少量の火山灰噴出
- 23 一時三三分小爆発
- 31 一時五八分爆発

阿蘇中岳山上広場に建っているカメラ型の阿蘇山上測候所。この観測室に掛けられている火山活動現況図には、四十年十月末の大爆発前後の火口の動きが、まだ白墨の跡もなまましく残っている。

気象庁の火山観測は、全国では約一五の測候所で行なわれているが、阿蘇山測候所もその一つ。ここで働く竹下睦雄所長（五四）以下一〇名の職員は、いわば火の山の灯台守ともいえるか。

ここに人あり
山は生きている
火山学が始まってから約一〇〇年。しかし、その進歩は遅い。医学でいうなら、まだ基礎医学も充分に究められていない段階だ。だから、爆発の正確な予知も現段階

では無理である。しかし、山は生きているのである。職員の悩み、苦しみもそこに集約される。火口を訪れる年間約二一〇万人という人たちに事故がないように、万一の爆発を可能な範囲で一刻も早く予知しようと、職員は毎日緊張の連続である。この道三十年という人もいるベテラン揃いの職員にしてそうなのである。その上、山を知らなければ恐ろしくわかってくるともいう。火山観測には常に危険がつきまわっているのである。そのことを如実に示したのが、四十年十月三十一日未明の大爆発前後の観測であった。



火の山を守る
測候所で第一火口の活動が活発になっ

たことを察知したのは、爆発一年前の三十九年九月。この時から爆発の時期を一刻も早く確実にキヤッチするために、例えば地盤の上下の変動を調べて危険度を知る傾斜計の記録紙も、普段は一週間毎に取り替えるのを、三日毎にするなど、万全の備えをとった。

四十年十月十九日午前二時、山上の職員は、地震計の上に普段は見落すような〇・七〇・八の微動の変化を認めた。これは爆発がいよいよ迫ったことを知る上で大きな手掛りであった。

活動が盛んになった二十一日十六時、竹下所長は第一回目の警告の火山情報をだした。いつ爆発するともしれず無気味な鳴動を続ける火口縁での職員の火口観測は、深夜にまで及んだ。この頃から、火口が小康状態になった四十一年の一月末までの火口観測は、それこそ毎日が必死の観測だったという。

大爆発の時、怪我人は一人も出なかった。確かに深夜であったことも幸いだった。しかし、その際には一〇名の職員の努力による爆発の前後を通じて二四回もわたった適切な火山情報が、大きな役割を果たしたことを見逃すことはできない。

厳冬の気象や火山の観測も辛い仕事ではある。測候所の勤務は山上と阿蘇駅に近い基地事務所に分かれ、山上で勤務する二名の職員は、一週間泊り込みの勤務



震動観測装置と取組む職員

を終わって交替するのだが、三十八年の豪雪時には一カ月近くも交通が杜絶した。そのため基地の職員は食糧を肩に担い、腰近くまで雪に埋まりながら、五時間近くもかかって山に登ったという。

こういった数多くの苦勞の連続の中で職員に共通して流れているもの、それは観光客を安全にという使命感である。だから、四十年の大爆発で一人の怪我人もださなかったことが、なによりも嬉しかったという。

そしてなによりも、阿蘇山に関係している機関や一般の人が、もつともつとろんな意味で阿蘇山を理解し、火山業務に協力して欲しいというのが、職員の大きな願いでもあるのである。



一写真は阿蘇火口にて一

グラビア特集

開発すすむ大阿蘇